

商いの新しいものさし

（株）商い創造研究所
代表取締役

松本 大地

第162回

「街づくり×商業」リアルメリットを極める方法

このたび、学芸出版社

綴った。

より『街づくり×商業』リアルメリットを極める方法』を上梓した。現代生活者は街に、商業空間に、公共空間にeコマースでは得られないココロの満足や体験価値を強く求めており、筆者の実体験を元に総論と各論を交え、街づくり商業の戦略と戦術から、なぜ街と商業が「共創」するのかを

商業街づくりを追求してきた。しかし、20年のコロナ禍以降は商業街づくりを、「街づくり商業」に置き換えた。コロナ災禍は生きること、暮らすこと、働くことへの大きな価値観の変化を及ぼし、商業施設と地域コミュニティとの共生を強く再考する機会になったから。数々のプロデュース活動から、「街は人を変えられることができる、人は街を変えられることができる」と確信している。この書籍を通じて、「街づくり×商業」が化学反応を起こしていく、「街づくり商業」の可能性を提案した。



なぜ、街と商業が共創するのか？
清水義弘 推薦
佐藤裕久

『「街づくり×商業」リアルメリットを極める方法』の表紙

「商いの新しいものさし」は11年1月から本紙での連載がはじまった。13年以上にわたり読者の

方々には拙文にお付き合いいただき、また日経MJや織研新聞などでも連載を続け、常にペンを持つってリングが上がってきた集大成が、1冊の「街づくり×商業」となった。

もののさしの連載でも伝えたが、今「街づくり×商業」で最も成長した都市がオーストラリアのメルボルンだと思う。メルボルンとの出会いは、長年にわたり通い続けていたポートランドだった。18年にポートランドのアルバータストリートにて、開業後から行列がでる話題の飲食店「プラウドメアリー」を訪れた際、偶然メルボルン在住のオーナーのノーラン・ハータ氏と会うことができた。プラウドメアリーの本店はメルボルンにあるり、2号店をポートランドに出店した理由を訊ねると、「世界で朝食文化へのリスペクトをしているのは、メルボルンとポートランドだから、2号店はポートランドに出店したと答えた。さらに、なぜ朝食やスペシャルコ

ーヒーにこだわるのかを聞いたところ、「シェフが力を込めて調理した朝食とスペシャルコーヒーは、1日のスタートを素敵にしてくれる」とのポリシーだった。それだけでメルボルンのライフスタイルデザインがイメージでき、「街づくり×商業」の研究題材として取り組んできた。本書ではメルボルンの街づくり商業やライフスタイルを詳しく紹介した。23年4月にはメルボルン都市圏人口が約580万人を超えてシドニーを1万9000人ほど上回り、オーストラリア第1の都市になった。異なる文化から多様性が育ち、寛容さが築かれたウェルビーイングな生活をする街は人を惹きつけていく。今、メルボルンは「20分生活圏（20-minute neighborhood）」を実現する政策を掲げている。20分生活圏は徒歩、自転車、公共交通機関で自宅から20分以内で日常生活のニーズを満たす暮らし

を実現しつつある。同様の政策はポートランドが先行し、22年にはパリ市が日常のほとんどを徒歩や自転車、公共交通機関で用事をすませる「15分都市」を提唱した。パリ・シャンゼリゼ通りでは30年までには4車線から2車線への車線数の減数や、さらなる緑化計画も進行中だ。世界の中心都市ではウォーカーフレンドリーを実現する取り組みが広がる。人が中心になる都市街づくりは、大きな潮流になった。「街づくり×商業」の歯車が噛み合うメルボルンは、世界が目指す先端多様性都市のトップランナーとして疾走を続ける。日本の横並びの都市計画、結果をコミットしない地方創生策、品性のない政治や未来に先送りする国の借金累積など、このままで未来に良いパトナリがリーできるのか、やるせない思いが募る。「街づくり×商業」による取り組みが社会的課題解決の一助になっていくよっつ心から願う。